

公現法親王と会津藩の関係について

熊野 秀一

はじめに

慶応四年（一八六八）から勃発した戊辰戦争では、多くの皇族が新政府の重職を担った。それに対し、佐幕派には東叡山寛永寺と日光山輪王寺を管轄した宮門跡の輪王寺宮公現法親王（後の北白川宮能久親王、弘化四年（一八四七）～明治二八年（一八九五））がいた。慶応四年三月、法親王は旧幕府の依頼で徳川慶喜の助命を新政府に働きかけたが、その過程で不満を抱いた。その後は東叡山で彰義隊を庇護して新政府への対決姿勢を鮮明にし、五月の上野戦争で奥羽に逃れて、今度は奥羽越列藩同盟の盟主に擁立されたが、最後は降伏した。

先行研究においては、法親王が同盟の盟主になってからの動向が主に重視され、藤井徳行氏などの諸氏が詳細に検討している^①。ただ、奥羽諸藩との個別の関係については、あまり分析が行われていない。本発表は最も早い時期から接触があった会津藩を一例にして、その点を明らかにしたい。

一 江戸での関係

鳥羽伏見の戦いの後、徳川慶喜とともに江戸に入った会津藩前藩主松平容保は、慶応四年二月一日、恭順を朝廷へ取り成してほしいと法親王に書簡で哀訴した^②。容保に、法親王による朝廷への仲介を期待していたことがわかる。

その後、法親王は二月二日に慶喜救済のため京都に向けて江戸の東叡山を出発したが、駿府で東征大総督府に訴えることとなり、三月七日～一二日に交渉した。そして、その結果を旧幕府の上層部に伝えるため、執当（東叡山の実務を担当）の覚王院義観が一三日に駿府から出立し、一六日に江戸城で報告した。その後、経緯は不明だが、会津藩士の河原善左衛門と面談した^③。これが、後のつながりの端緒となったといえる。

三月二〇日に法親王は江戸の東叡山へ戻ったが、その後は同山を拠点とした彰義隊を庇護して新政府と敵対した。さらに閏四月二二日には、日光山からの使者、功德院慈亮・照尊院猶海から奥羽諸藩が同盟を結成したこと、会津藩が江戸まで進撃するつ

もりであることなどが報告された。これに対し、法親王側は早期の実行を求める旨の書簡を発した^④。法親王側が会津藩に期待していたこと、彰義隊と会津藩の連携が模索されたことなどがうかがえる。

さらに法親王は令旨を佐幕的な藩に与えて、新政府軍との対決を呼びかけた。会津藩にも、閏四月二六日に使者を派遣して令旨を与えている。しかし、会津藩側は「主従感銘せしも道路閉塞せしにより奉答せざりき^⑤」と応じられなかった。結局、五月一日の上野戦争で彰義隊は壊滅し、法親王も側近達と東叡山から脱出した。会津藩の江戸攻略も実現しなかった。

二 奥羽での関係

東叡山から脱出してから、法親王は榎本武揚率いる旧幕府軍艦隊を頼り、五月二五日に海路で奥羽に向かったが、会津藩には六月六日～一八日の期間に滞在した。その間、法親王は容保と頻りに直接、対面している（六、九、一〇、二二、一六、一七、一八日）。実は七日に容保は日ごとに何うと使者を通じて伝えたが、法親王が拒否していた。この一連の出来事から、容保が法親王を重くみていたことがわかる。

また、会津に着いて以降、法親王主従は今後の方針について容保やほかの同盟関係者と協議を重ねた。九日に同盟の盟主を引き受けるための条件を提示し、さらに一六日には盟主としての具体的な役割について言及している^⑥。即ち、同盟における法親王の位置づけが模索されていたといえる。

法親王が会津藩を離れてからも、会津藩の家臣達はその後の活動を支えた。その一人に小野権之丞が挙げられる。彼は一八日の法親王の会津出国時に藩からの命令で随行した。彼の活動の一つとして、まず、白石動座が挙げられる。六月二〇日に法親王は米沢に入ったが、二二日に小野は白藩の安部井政治とともに仙台藩・米沢藩の藩士達と会談して、法親王に白石への動座を要請することに決め、翌日伺った結果、同意する旨の返事を受けた^⑧。

七月二日、法親王は仙台城下へ赴いたが、五日には仙台藩がそのまま同地にとどまるよう主張して問題が生じた。そこで、小野が周旋して、結局は仙台藩に白石動座を認めさせた^⑨。同じく六日、八日にも小野は安部井とともに義観と白石の件について相談している^⑩。小野が同盟の衆議によって決まった白石動座の方針を維持させようとしたこと、さらに義観などの法親王の側近達と協力していたことが明らかとなる。

七月一三日に法親王は白石へ移り、その後は白石城内の「公議府」という会議所で、加盟諸藩の代表達と、問題の処理にあたった。会津藩からも、小野やほかの会津藩士、あわせて計五名が「密議」に参加していた¹⁾。会津藩が同盟に積極的に関わっていたことがうかがえる。

三 法親王と会津藩の関係の特徴

法親王と会津藩の関係は同盟結成前からあった。それは、

○会津藩は親藩であり、法親王は徳川家が設けた東叡山・日光山の門跡であった。そのため、両者とも親しみがあつた

○会津藩が奥羽諸藩のなかで早い時期から新政府軍の討伐の対象となつたため、法親王の権威を必要としていた

○会津藩は京都守護職時代から孝明天皇や親幕の皇族を支えていた。そのため、法親王との接触にも慣れていて

といった点が考えられる。ただし、八月末に会津藩は新政府軍によつて城下を包囲され、九月になつて法親王が仙台・米沢両藩と共に会津藩より先に新政府に降伏したことで、両者のつながりは崩壊した。

おわりに

法親王は、会津藩と少なくとも慶応四年二月頃から接触があつた。そして、奥羽藩行後は、盟主をめぐる協議、人材の提供、他藩との仲介などのつながりがみられた。このように法親王は他藩と比べて、会津藩から強い支持を受けていた。それは法親王が容保と頻繁に会つていたこと、小野をはじめとした藩士達が法親王を助けていたことなどからもわかる。

即ち、法親王と会津藩の関係は長期に及び、六〇八月に密接なものとなつたが、九月前後になつて崩壊したと結論づけられる。今後は、より多くの藩と法親王の関係をみていくことで、戊辰戦争における法親王の果たした役割の一端を明らかにしたい。

註

(1) 藤井氏の業績は「明治元年・所謂「東北朝廷」成立に関する一考察」(手塚豊編『近代日本史の新研究』1、一九八一年)や「明治元年・東北朝廷処分の一考

察」(日本法政学会創立五十周年記念論文集編集委員会編『現代政治学の課題』、二〇〇六年)が挙げられる。法親王に関する研究は、ほかに工藤威『奥羽列藩同盟の基礎的研究』(岩田書院、二〇〇二年)、遠藤進之助『戊辰東北戦争の分析』(古田良一博士還暦記念会編『東北史の新研究』、一九五五年)、亀掛川博止『奥羽越列藩同盟の性格と東北戦争の意義』(II)(日本政治経済史学研究所編『政治経済史学』第一七四号、一九八〇年)、杉谷昭『輪王寺宮公現法親王の奥州動座』(佐賀県立佐賀城本丸歴史記念館編『佐賀県立佐賀城本丸歴史記念館研究紀要』第二号、二〇〇七年)などがある。

(2) 『藤岡屋日記』第一五巻、四七一頁参照。

(3) 『覚王院義観戊辰日記』慶応四年三月一六日条(『維新日乗纂輯』第五巻、三六五頁参照)。

(4) 『覚王院義観戊辰日記』慶応四年四月二二日条(『維新日乗纂輯』第五巻、三七二頁参照)。

(5) 『会津戊辰戦史』第一巻、一九二頁参照。

(6) 『覚王院義観日記』慶応四年六月九日条(『維新日乗纂輯』第五巻、三九六頁参照)。

(7) 『覚王院義観日記』慶応四年六月一六日条(『維新日乗纂輯』第五巻、四〇四頁参照)。

(8) 『上杉家御年譜』第一八巻、二二〇二頁参照。

(9) 『小野権之丞日記』慶応四年七月五日条(『維新日乗纂輯』第四巻、一一七頁参照)。

(10) 『覚王院義観戊辰日記』慶応四年七月六・八日条(『維新日乗纂輯』第五巻、四三九・四四二頁参照)。

(11) 『復古記』第六巻、五五八頁参照。

(大学院文学研究科博士後期課程史学専攻)